

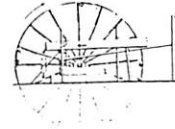
國史纂集

第9号

1939年5月15日発行
 別府大学文学部
 日本史研究室
 〒874別府市北石垣
 電(0977)67-0181

水車

佐藤 重巳



河川とそこを流れる水は、従来、驚くほど多目的に利用されてきた。生活用水・農耕用水としてはいわずもがな、水上船便・材木流しなど運輸運搬手段のほか、漁具類採取の場としても不可欠の存在にあつた。最近、自然保護の観点から、河川汚濁防止をめぐる昔間の声にはかしましいものがある。森林の乱伐・不管理、工業用水の大量取水、生活汚濁水の流入などによって、清浄であるべき河川・湖沼が汚濁し、水の枯渇が進み、人々の生活をびびりかす事態に至っているからである。

河川の水は、人間の生活にいい切れない程多大な恩恵を与える一方、洪水などに際して頭おされるその威力は、ひとひとを大いに畏怖せしめた。そこに水に対する信仰が形成された。そこに水に対する信仰が形成された。河川水流の利用法には、古くから一つ、動力源としての利用があつた。いわゆる「水車」である。我国では、すでに早く平安時代初期の天長八年(八二九)に、唐の製法を模して、水車を作る様命令された事実(「類聚三代格」八)があつたが、この場合の水車は、農耕用の「揚水」目的のものであつた。水の流圧を利用して水車を回転させ、水面より高い位置に水を汲み上げようとするものである。

一方、米穀の揚摺技術は、すでに先史時代から、石臼・石皿などを用いてなされており、これは、古代期に及んでは、相当の技術水準に達し

目次

水車	佐藤 重巳	日向高千穂地方の水車	花田 直樹
備後地方における水車遺跡	佐藤 由利	寛永十八年平戸藩新参古参騒動について	出口 康子
朝倉三連水車	市原 多美	高良山帝釈天堂基本金記念碑	森 猛
水車小屋の遺跡調査	出口 康子	昭和六十三年度日本史関係卒論題目	一覽
竹田町山川地区における水車施設遺跡調査	工藤 順子		

ていたが、その最たるものが「碾磑」(みずうす)であつた。「みずうす」は、水中に架設した羽根状の輪が、水流によって回転し、たて回転する軸の運動を利用して米穀を揚摺する施設であり、この技術は、早く豊後

らが大陸より将来したものという。(滝川政次郎「碾磑考」『日本社会経済史論考』所収)
 水車にしろ、碾磑にしろ、これらの施設は、これまで人力をもつて行つていた作業を、無限な水流によって連続的に行なうことを可能にし、生産性を一挙に引き上げる大技術革新であつた。

横軸で回転する水車の運動を、縦軸運動に転換する方法は、すでに中世初期には始まり、更に大きい技術革新となつた。以降、中世・近世期を通じて、水を動力源とする水車の架設・利用は、爆発的な発展を遂げ、近世末期から近代初期にかけて、繊維工業マニファクチュアにおける一

大動力源となつたことは、周知の事実である。
 近世期の村方史料の内に見られるおびただしい数の「水車願」に係わる文書史料は、河川の公益性をめぐる問題とともに、農村経済史解明にとつて、黙視し難い史料である。
 従来、飯米・酒造米の多くは、水車を利用した春臼で精米されたため、河川に架設された水車のある風景は、農山村を代表する風物であつた。貞しさの代名詞とまで考えられた水車稼業の家の多くが、戦後の一時期「百円札の一尺況」をなし得たのは、無限無料の動力の恩恵多大なるものがある。
 最近、電動力の普及によって、実用的水車は、ほとんど姿を消し、観光資源として辛うじて余命を保っている状況にある。
 いまだ、水車遺跡や、その稼業体験者の存在するうちに、深い関心を寄せて置く必要がある。

江戸期水車架設願の一例文

(楳津文書)

以書附奉願候御事
楳津村 鉄 藏

試水車一挺
但、白粉拾貳挺、当戌より未ル直
年迄五年

右水車之儀ハ、村内川筋遊水御座
候間、右遊水を受込水車は立近村

酒造米并飯米等搗候様仕度、尤、
御運上之儀ハ、銀拾五匁上納仕度
奉願候二付、得と承札候処、何ぞ
差障も無御座候間、願之通被爲仰
付被下置候様奉願候、此段相叶候
様、宜被仰上可被下候、以上、
(文政九)

戊十二月 村役人
大庄屋 宛

備後地方における水車遣跡

佐藤 由利

昭和五四年から五五年にかけて行
われた国立科学博物館の水車のアン
ケートによると、水車の稼働数は、
広島県で三二となつてゐる。その中
で備後地方における水車は、現存し
てゐるものは少なく、ほとんど動い
てゐるものはなかった。現存する水
車は、この備後地方に九台ほどであ
つた。その中から、二例をあげてみ
る。

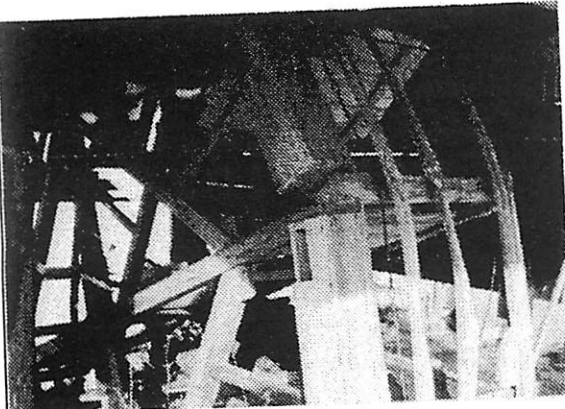
現在、比婆郡西城町の栗と今西の
二ヶ所に揚水水車群が残存してゐる。
昭和三五年をピークに以降は更に少
なくなつてゐるという。この水車は、
いつ頃作られたのかは、さだかでは
ないが、ため池や大きな谷川のない
この地域を開すために早くから導入

されたものと考えられる。う西の古
老近藤さんの話では、五年前までは、
実際動かしてゐたが、休耕や転作に
よる廃止や、新調費に材料だけで一
五万以上もかかり、耐用も二〇年前
後で、経費や管理保存などの面から
動力揚水機に切り換へたという。
この水車の大きさは、揚水点の
高さによつて多少異なるが、直径三
メートル前後の車は「くも手」から
出た二〇枚の「羽根」に水を受けて
回転し、羽根と羽根の間にとりつけ
た同数の「杓」によつて水をくみあ
げるもので、この杓は細長い四角箱
が、羽根に対して直角にとりつけて
あるのが特徴。用材は、昔は車軸に

現在は、車軸は鉄を使い主体は檜で
ある。そして、外周枠に竹を使つて
いる。こゝで竹の湾曲性がうまく利
用されてゐるのなと思つた。こゝ
の揚水水車は、小型で二町分の水田
へ水を揚げるという。大型なら三町
分くらい汲めるが、水の流れが早い
と壊れやすいということだつた。

また、栗という所には、時期がく
ると動かしてゐると聞き、訪ねてみ
たのだが、水車自体は保存状態で、
残念ながら近所の人によると今でも
五月頃から揚水用に使われてゐると
いうことだつた。

次に、この西城の隣の東城町の帝
沢峠の入口には、直径五・五メートル



中の大型水車があつたのだが、今は、
水車自体は全くなく、跡をおもひせ
るばかりとなつてゐる。

つきに府中市行勝の上西さんのお
宅に水車があるときいて訪ねた。こ
の水車は、精米用に使われてゐる
もので、直径二メートル弱の小型の
材は檜で、今の時期は動かさず、乾
かして長持ちさせると一三年以上も
つという。以前は、松で一口一、二
年が限度だつたらしい。この日は、
特別に動かしてもらへた。上西さん
の話では、水車で搗いた米は、焼け
て熱くならないのでおぼろげがあり、
ご飯がおいしく、水車がやめられな
いという。上西さん宅では、一回の
搗量は釜升五合ぐらゐで、急ぐとき
などは三分を夜に入れ換へながら
一晩中搗く。一日三回、夜は十時頃
入れかえる。困難とせば、水の流れ
で水車のまわり具合を調節すること
だという。こちらの水車は家の裏に
とりつけてあつたが、夜中でも水の
流れる音で聞き分けて様子を見に行
くという。この水車は、片面四枚の
曲がつた板(輪がい)をあわせて間
に一六枚ほど板を入れてそこへ水か
たまつてまわるものである。この水
車は、この輪がいのまがり具合の良
い木が少ないのでなかなか作れない。
また、輪がい一枚ごとに経費がかか